〈資料〉

折口信夫「発生日本文学史　室町文学史（下）」

（昭和四年・國學院大學大学部講義）

伊藤高雄編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が大正末年から行なった講義・講演を、学生で門弟であり、昭和六年から八年まで助手を務めた小池元男氏が筆記したノートの一部である。

・資料の解題は、先に國學院大學栃木短期大学国文学会の『野州国文学』第八十六号（平成二十五年三月）の「小池元男ノート―折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート―」、及び『國學院雑誌』第百十四巻第十号（平成二十五年十月号）の「折口信夫・國學院大學講義その他―小池元男・石上順ノート―」に報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本号に翻刻する資料は、そのノート番号46・47「発生日本文学史　室町文学史」（昭和四年・國學院大學大学部講義）の一部である。

・翻刻は、伊藤が行った後、武蔵野大学兼任講師の渡部修、國學院大學大学院生（当時）の郷田典子と読合せをし、最終的に伊藤が整理した。

・表記は原則として常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いたところもある。

判読できない箇所は□で示した。

発生日本文学史　室町時代文学史（下）

昭和四学年度大学部講義　折口信夫教授

（十一月八日）

継母子物語

継母子物語の双紙の話の、継子が男、女である事によつて物語がちがふ。

ところが継母子の話は室町時代まではまだ貴族の間の話。江戸になると民間の話になつて来る。室町の継母継子物語にかゝれてゐる世界は貴族□（空欄）が特色。女の物語で標準は、中将姫の物語。もとは當麻寺の縁起に属するもの。この中将姫の物語を次第に変化させて行つた。この物語の前後で大分おもかげがちがふ。一種の宗教的の継母子物語の大きなものが中将姫の物語。この物語を翻訳したと思はれるのは奈良朝を下げて中頃の頃にかへた。中世、我々よりさう遠くない頃の物語の意味で漠然としたもの、それから大昔の物語がある。気分が近代的でも大昔の物語の中将姫物語を中世のものにひきなほしたのが岩屋の草子（対屋姫）である。恋物語で中将姫と落窪物語を混じたもの。落窪の方が古いが、民間の中将といづれか先かいへない。恋愛によつて継子の一類がさかへるもの。対屋姫物語は中将姫物語と落窪物語のつきまぜ、宗教的の継子、継母念仏式のものをよむ物語の上のものと一緒にして来た。要所〳〵は、中将姫物語と同じこと。ところが本当は中将姫物語は名高いが、おしつめて行くと継母の存在を必要としない。継母の話が起つたこと、若い苦しんだ姫の話は継母子型へ入れたのである。

中将姫の研究　照日ノ前といふ母、と父は横佩の右大臣（藤原豊成、奈良朝の人）。昔の物語は無茶苦茶に結びつけたのではない。何か関係があつてつけるのである。名前に因縁が結びついてゐる。歴史的な父だとて物語は正しい事にはならぬ。照日は巫女の名前（鈴木正三の因果物語）。神明信仰の巫女が、この名前を

もつ。やはり熊野と関係あり。中将姫はひばり山へ捨てられた。ひばり山は諸所にあるが、紀州にあるのがもとであらう。紀州と熊野との境ひ目に近いところにある。

すべて中将の物語、熊野に関係ありさう。御伽草紙、説経、歌念仏等を見る上の参考になるが、書物を見て、どこの神の由来を説いてゐるかわからぬ。出発点と結着点がちがふ。筑土君が、苅萱道心の物語で、そこの疑問にふれて行つてゐる。高野に関係がありながら善光寺の親子地蔵と結びついてゐる。これは不思議でなく、どれを見ても両方に引かゝつてゐる。これは結極かういふ事になる。名高い社寺より布教に出た人々が、落ち着いた先で自分等の信仰を広める。例へば高野聖は高野の信仰を宣伝するかたはら、自分の信仰をもつて歩いてゐる。正式の信仰は世間を渡る手立てで、実は低いものを宣伝す。

ある土地に落ち着くと、物語が特殊な物語が出来、変つた信仰が伝はる。時代が経つと、もとの高野と関係なく見える。苅萱も高野山を出発し、善光寺で落ち着く。高野の信仰をもつて歩いた聖の中の、念仏聖に萱堂聖がもつて歩いて善光寺附近に落ち着いて、善光寺によつて栄へたものがもつてゐた物語は、善光寺で結着がつかねばならぬ。その結末は高野と関係ない。自分の信仰の（以下、一行空欄）

萱堂の聖は、地蔵菩薩の信仰を持ち歩いた。すると善光寺の親子地蔵の物語が出来、後世からは（以下、二行空欄）

山椒大夫　もつと離れたものに、山椒大夫といふのがある。久しい歴史を、念仏、説経、浄瑠璃とあつたもの。これは由良港に居り、この物語の中心は丹後の由良の港にある。物語の出発点は岩木山に関係がある。岩木の判官の息が父死後母、息女、乳母と流浪してゐる時に、売られて山椒大夫に苦しめられる話。

浄瑠璃ではわからないが、現在兄弟は、岩木山の神としての伝へあり。安寿と対王（厨子王）の名を見ても安寿は念仏関係の比丘尼、もつと遡ると、熊野念仏では、観音と強い関係ある故に寿といふ。観音の申し子、氏子といふ事で寿をつける。安寿で見当がつく。この名前のつく前に岩木山に姉弟の話あり。岩木山の神は

安寿姫で女だといふ。早く姉の方が山へ登つて、岩木山の神は丹波・丹後の国人が嫌ひ。昔より出羽奥州ではひどい波も丹後波といふ。この波が立つと丹波丹後の人が来てゐるとて、調べると果して来てゐるといふ。異境人を近づけない話である。綺堂の脚本にも貞任宗任のものに丹後波の話が出てゐる。

丹後波の話がある。これは話に連絡あり。岩木山の権現と山椒大夫との関係があるとすれば丹後波にある。

岩木山の神は丹後で殺されてゐる。

われ等が考へると岩木山の信仰は北日本に広く行はれた。岩木の権現の信仰が、丹後の金焼地蔵の縁起を述べたのか、金焼地蔵の縁起だから金焼地蔵の事をいふてゐるやうで岩木と関係あり。何れが元か不明。いつのまにか最初の話が変つてゐると思ふ。関西の社寺のものであつたのか、丹後と仲の悪い岩木の物語となつた。結末は布教者の行き止つた場所の事になつてゐる。

かるかやの物語はこれ丈で終つてゐる。

山椒の物語を見ると室町か、もつと古いもので、その後が大変である。清水の観音に助けられて出世する。この型は本地物語に近くなつて来る。本地物語の仏教式色彩の少ないもの、それを御伽草紙の中の御伽（化譚）でなく今の童話式のものに多い。御伽草紙の中の子供物の一要素の出世物語だと思ふ。

中将姫と宇津保と　中将姫の話は、継子継母の物語でない。その話の一番見る事の出来る古いものは、鎌倉に出来た『宇津保物語』（古い宇津保物語を修正し新作加はる）でもまづ古い部分と思はれるものは、俊蔭の巻である。この巻と非常に関係あり。全体、宇津保は、継子物語の目標、それとは別に「俊蔭」に清原俊蔭の女の話がある。娘は、山の奥の杉山のうつろ木の中で生活した……後に父親と山でめぐりあふ。この話は中将姫の話とすつかり同じ。藤原広嗣の乱を征してゐる間の出来事。山に捨てられ、臣がかへらずについてゐた。父が九州から戻つて来て、父にめぐり逢ふ。要点は、皆同じ事。継子物語は中将の話では、話を複雑にする為についてゐるだけで、俊蔭の姫と同じ。捨てられた姫が見出される話に継子、継母の話をつけただけ。それが岩屋の草子になると人間的になる。宇津保式のところがまし。近代的な感情が入つて来る。それが断定出来ぬが、書物の影響といふより継母念

仏、下級の宗教者の唱導――一種の説経によつて民間にひろがつた。民間では適切な階級にその話をうつし、今まであつた民間の説話は、継母子の物語へ近づけて行く。継母子の物語は人気があつた。すつかり民間のものとおりて了つた。この古い継母子の物語には、継母の連れ子が大した要素にならぬ。継子がにくいだけ（一）、変化して、おほんの子が出来た為、又は連れ子をして来て、継子を憎む（二）、古いが宇津保物語はその中間になつてゐる。次第にのちほど本の子を作つて来る。さうなつて世の中に沢山話が増す。すべてあはれな傾向の話を継母子に引き寄せる。童話の特色で、民間で江戸に栄へたもの。

御伽以前、本（ほん）の子は個性がはつきりしない。母が継子をいじめる為のものである。次第に江戸になると本の子が継子に同情する話（ありしの姫）になつて来る。継子を助け、好意をもつて、母と同じく継子をいじめる話はない。継子にはきつと同情者があり、ことにそれが発達してゐる。御伽草紙は継子継母の物語が江戸になつて飛躍する導きである。

御伽草紙の読者　子供の話、一体御伽草紙は子供に読む本のやうに見えてさうでなく、上流の女はすべて読者で若いものはこれにて教育せられ、子供も読み、又は読んで聞かせてもらつた。男の子だけのものでなく、女の人のもの、読んで聞かすところから次第に男の子の読み物になり、一つの特色をもつて来る。御伽草紙をはつきり分けると男もの（主に子供）、女ものに分れる。

出世物語　第一に出世物語。山椒大夫の対王、一寸法師の草子、ものぐさ太郎草子（愛宕の本地）、この二つが出世物語のごく幼稚な型で標準的。

この話は神が人に育てられて本当の神になり、霊異を発揮する。昔の神道上の信仰の説話化したもの、人間に翻訳されたもの、この二つはことに翻訳のまづいもの。

出世するまでは低脳である。はじめは何にもしないものがある時にはかに立派な人間になり、認められる話。今いつたやうな対王の話はこの型に入つて行く。偉くない子供が本然と出世してゐる。室町の時分には出世するのには都へ行かねばならぬ。諸国の士が大番役に京へ行く故に京を出世の地としてそこへ行つて見出さ

れて出世する事になる。この話のおこりは、幼くて何の役にもたゝぬ神が人に拾はれ育てられて、偉い人になる。話が唱導として行はれてゐたのが、いつの間にか人間世間の事に翻案せられて、物語られた。だからそのあとには本式に行くと本地物にならねばならぬ。不自然だが昔の人に自然であつた。神が人間界で育てられて大きな神になる物語。一つの人間になつて出世した後ものたりなく更に大きくして神か仏にする。さうせねば唱導としての役目がつかぬ。それが本地物語になるもと。愛宕の本地をものぐさといふてゐるが、何の関係もない。

穂高の本地といふのを愛宕の本地となまつたのである。信州の穂高明神の神名を説いたもの。結極、鎌倉・室町へまたがつて、物語の特色と考へられる、日本中の神々に従来の話をくつゝけて了ふ。この神のこの世に生きてゐた様子はかうだという。形式必ずしも信州の穂高出でなく、従来あつた物語が穂高明神について行く。愛宕の本地、穂高の本地といふのは沢山の類が中で単純で信州より出て、信州へかへつてゐる。死後穂高明神となつてゐると。この話の起りはわかりやすい。穂高の縁起と云ひ切れないがまづさういふておいてもいゝ。

かういふ出世物語が次第に一種の違つた色合ひを持ち、怪力物語をば取り入れて来る。日本の民間の物語は道徳の色合いをつけてゐない。――つけるのは宗教家、政治家――怪力の物語が発達してゐる。昔からあるのだが御伽草子等でたとへば入鹿等いふもの。酒呑童子の草子、つまり怪力をもつたものをば讃美してゐる事が著しい。男衾三五郎、妖怪と怪力と同じもの。これを退治する人間が出来る。われ〳〵自身が信頼されて来る。だから、さういふ風な発達は御伽草紙にはじまつた事でないが、特別な色合いをもつてゐる。巨人怪力に対する讃美がある。鬼、魔術使ひ、残虐な事をするものに一種のあくがれをもつてゐる。

それが更に何かの方法で弱点をつかれて亡びる。人間の巧猾な智慧で力のあるものが負けて了ふ。さういふ風に昔よりあるが、その点御伽草紙は平凡で力の強い人、又は宗教上の法力で退治る。

おかしい事は皆地方の豪族といふやうなもの（庶民は問題にならぬ）、中心は武家の階級の伝説、智識でふ

れて行つてゐる。大きな武家たちの祖先は怪力をもつた巨人。それを都の偉い人に翻訳して行く。
古くは一種の妖怪のやうな巨人が自分等の祖といふ。その系統より行く故に怪力をもつて行つてゐるものとのろはない物語あり。今度は人間が出て怪力を退治る話になつても、それがまた人間的でない事をするやうになる。坂田金時等はその親分。一種の巨人と同じもの。

金平本　こんな方面の御伽草紙その他のものが発達して、浄瑠璃の台本として語られ、江戸の古浄瑠璃の金平ものとなつて来る。四天王の子供の活躍となる。もつとも金平浄瑠璃が新浄瑠璃の出る前に活躍したのは歌舞伎芝居の影響もあるが一面浄瑠璃の世界に怪力の要素が行はれてゐた事はあらそはれぬ。昔の人はいつまでたつても子供の頃の見聞を繰り返して楽しむ故に話が大体に変化せず、局部的に変化して大人の要求に従つてゐる。今と昔とことなる話。見るものが少なかつた故であらう。
だから自然と物語の根幹はかはらないでも部分的変化ははなはだしく、誇張になつて来る。

怪力の物語は一方、妖怪物と一つの筋を引いてゐる。つまり本当の鬼だとかいふやうなもの、御伽草紙の世界では妖怪をおにと考へてゐるが、割合、こはくない。割に善良なもの。こはい所の出るのは聞き手、語り手の欲求で、誇張したところ。人間かおにかわからぬところに。それは巨人の怪力ものだが一方小精霊の物語あり。それを、鳥獣物語といふておく。人間より小さなものに不思議な力あるものを考へ、も一つ進むと、器物の精霊の物語になる。
大抵御伽草紙では、人間と同じ感情を鳥獣器物に与へてゐる。だが、よく見て行くと、鳥獣物と名付くべきものは単なる擬人の物語でなく、そこに一種の小精霊の物語であつた痕跡を残してゐる。小さな、人間と違ふものゝ不思議な力をもつた仲間の物語で、この間に人間が入らぬ。が後になると人間が入つて行く。鵜鷺合戦物語等、えぽつくを作つたものであるが江戸に伝つて黄表紙に入つて非常に発達する。精霊同志の世界を人間がうかゞつてゐるやうな話。前から物語絵には平安末よりあり。鳥羽僧正の百鬼夜行の絵巻物。鳥羽僧正（覚猷）の書いた絵巻物にはこんなものが多い。

だから皆彼の作として来た。さういふところから筋を引いてゐる。室町になると動物の話にしなくてもよい事を動物であらはして来る。人間世界の事を一種卑怯な態度で何でそれが出たか、この当時の社会相のみで考へてはいけない。歴史的に出て来る意味がある。この、動物同志の間の話と同じものに器物の精霊の話がある。道具が古くなると何でも化ける。西鶴の諸国咄には道具の化けた話沢山ある。これの方が古い鳥獣物語をおしすゝめる力となつてゐるのではないかと思はれる。

その中で一番名高いのは付喪神。草子自身にはじめてつけた名でなく、古くなつたものがこはいといふ故につけたのである。

もゝとせに一年たらぬつくもがみ、われをかふらしおもかげに見ゆ

この頃には恐れはなかつたか。これから引出して古いものに対する一種の怖れ。付喪神があつたのでなく、古器物類が精神を生じ来て、わざをする。

付喪神も御伽草子の中へ入れてよい。この系統のものも人間と交渉のあるのと化物のみがやつてゐるのもある。後者の方が古い。分福茶釜の茶話がこの後まで残つたもの。

（十一月十五日）

妬心物語

妬心物語。多く怪談的結末をとる。

妬心物語は江戸になると材料がありすぎてどれかの物語だとあげにくい。一つあげたゞけではあまり部分的となる故に概念的にいふ外ない。

江戸の物語は一の特色あり。円満な結果にならず、大抵悪い結果に陥つてゐる。残虐なる事が起こり、家が壊れ、多くは、江戸式の怪談となる。

江戸の妬心物　嫉妬は江戸の文学のはじめからの題材で、ことに近松の浄瑠璃に嫉妬を題材としたものが多い。『弘徽殿嫉打（こきでんうはなりうち）』、『花山院鵜羽産家（うのはのうぶや）』の別名、その他彼の初期のものには、嫉妬を主題としたもの多く、その他嫉妬を入れたもの多し。嫉は国字である。近松の嫉妬は特殊である。嫉妬した為に非常な事件がおこる。『笹の権三重帷子（かさねかたびら）』等を見ても、法界悋気の為に非常な事である。『大経師昔暦』、おさん茂兵衛の話に

なるとやはりおさんが亭主以春に対する嫉妬、嫉妬に二通りある。亭主以春が、何でもころがす奴、はしまめ男をおさんが懲らしめたいと思ふ。一方茂兵衛は相当な男ぶりでありながら、色ごとを知らぬ奴。おさんがお玉の部屋に寝てゐたところへ茂兵衛が来て、間違つた。近松、嫉妬の題材の用ゐ方がうまい。当時の女方の役者を生かした経験からである。都万太夫座に関係してゐた関係から、人形の世界に入つても女形を働かせる為に、しつかりした女房を書く。これがヒステリツクに気が強い事になつてゐる。近松は嫉妬の扱ひうまい。

江戸にはうんとある。が、結局は怪談に落ち込む。この嫉妬は江戸に独自に発達したか。

妬心物の発達　妬心物は古くより種がある。その中心になつてゐるのが室町の小説全体にわたつて多い。一体嫉妬といふ事はどんな事かと云ふと、男を愛するからだと云はれてゐるが、常識にすぎないが、昔よりさういふ風に考へてゐる。偉い人ほど日本人では妬み妻を有つてゐる事になつてゐる。歴史の上で妬み妻は大切にあつかはれてゐる。古事記の須世理比売よりの妬み妻、仁徳記を見ると、妬み妻の話が大部分。仁徳色好みで、沢山の女を征服する力をもつてゐる人が偉い。女に思はれるといふのは平安朝以後の事。女を征服する人間的、宗教的の力を持つてゐる人がよい。すると嫡妻（ムカヒメ）は第一の地位にゐる故にそれに対して嫉妬する。奥さんは一群になつて来る。日本の大昔は七人ほど来る。その団体間では嫉妬しない。平気で年が行くと譲る。ところが他のものに手を出されると嫉妬する。一種の勢力争ひだけでなく、神秘な意味がある。宮廷の勢力のある女は宮廷の宗教の中心。他の宗教を持つ女が入つて来ると困るので、嫉妬する。後に心理的の争ひとなる。はじめは宗教的勢力の争ひ。ところが日本の歴史で妬み妻の歴史で一番美しいのは仁徳の磐姫である。これ前には理由があつた。磐姫は非常な嫉妬家で天皇を非常に苦しめた。終ひに、禊に用ゐる御綱柏を熊野へとりに行つてゐる間に、女を引入れられた。立腹して持つて来たものを川へ捨てゝ山城の筒城の宮へ行つて帰らず。すると天子の持つてゐた呪力がなくなるので、天子も取り戻さうとなさる。その間に歌が入つてゐて綺麗にしてある。

嫉妬をさう醜いとしない宗教上の勢力争ひ、少し変はると、妬み妻を持つてゐる人は沢山の女を征服し、国々を自分に集めてゐる偉い人と考へられ、更に人に好かれる人故に妬み妻を持つ。故に偉い人だといふ。

平安朝になつては、また嫉妬あり。宗教上の嫉妬と実生活の嫉妬とは違ふ。作物の上に表はれるのは嫉妬の理想化せられたもの。妬心の物語は時代の色彩、平安朝なら平安式の色合ひを持つて来る。そこに意味がある。例へば、村上帝の安子中宮は非常に嫉妬深い人である。宣耀殿の女御――髪の長い美しい人であり、帝の寵愛をうけた――為に安子と宣耀殿と嫉妬した話。そんなのも実際の事でなく、昔の妬心の物語にそんなものが出た。日本の妬心の物語は更に上らねばならぬ。女の妬みは人をそばへ寄せ付けない。いやだ、といふ事である。嫌がつて近寄せまいとする動作である。この妬むといふ事は、実は妬みの神がある。妬みといふ事を黄泉の国よりもつて来た神で出雲人の伝承では、それを須世理比売といふ神にしてゐる。すせるといふことばは、後の火須勢理命（邇邇芸命の子の三人の兄弟の一人）、火遠理命がその弟の。火須勢理は火のいぶつてゐる時に生れた神。すせるは燻るといふ事。須世理比売も燻し姫といふ事。この系統のことばは皆嫉妬になる、焼く、燻す。

平安朝にはふすぶといふ。くすべる事である。何の為にそんな意味にするか。昔の人から、すせるは、燻す、焼くと云ふ事。正確に何故に嫉妬の意味になるか私は知らぬ。

須世理比売は黄泉の国より大国主が持つて来た姫。磐姫以前はこの人で、この人についての嫉妬の物語はずつとつゞいてゐる。男女関係では、大国主、仁徳同じ感じする。木花咲耶姫の姉は、磐長姫、嫉妬の呪ひの神である。天子の御子孫の寿を短くした人である。嫉妬に呪ひが付いてゐる。日本の信仰には次第に嫉妬の神が増して来る。路傍の神は、皆、嫉妬の神を利用してゐる。

橋姫の信仰　ことに、他国もあるであらうが、一つは女の嫉妬心を利用して、女を道端に祭る。平安朝になるとはつきりしてゐる。これを橋姫といふ。女を道端へ祭る。かゝる姫を橋姫といふ。橋のたもとの辻君と後に考へてゐるが、こちら側から、向ふ側へ橋姫を

据ゑておいて人が渡らぬやうにする。国を防ぎ、守る為に女の強い霊魂を持つてくひとめて貰ふ。

橋姫は諸処にあれど宇治の橋姫（宇治の南岸）、伊勢内宮のたもとに橋姫があつた。何か橋には一種、不思議な信仰あり。京の一条戻り橋は清明の妻でそこで死んだのをまつゝたと。有名なのは宇治橋姫。住吉明神の妻で、嫉妬深い。

嫉妬深いのは、違つた信仰のある国から入るものを追ひ退けて入れぬ神あり。その神が女になり、その人が妬み深いので、そこにおいてあつたと考へる。また仮説だが、橋姫物語と云ふのが室町にあり、『太平記』にもある。橋姫の信仰を宣伝して歩いた宗教家があつたのでないか。類型の話が諸国に散らばつてゐる。それで、この妬心の物語は本当のところは人間の妬みの物語でなく、神が人間、違つた信仰を持つてゐる人を近づけない話をしてゐたのが女である。神の妻の女である。更に人間で神に仕へてゐた女等といふ話になり、一転化して本当の人の妬みの話になる。

嫐討ち　丁度室町より起つて来た事で、例へば種彦の『還魂紙料（スキカヘシ）』には嫐討（ウハナリウ）ちの絵が引いてゐる。嫐は室町に盛んに行はれた。これは伝説かもしれぬが、信じて申したい。女で一軒の家の住む女では問題なく、あちこちに住んでゐる女のところを亭主が歩く。奥方は一党を引き連れて、新しい女のところへあばれ込む。日常の道具を持つて彼等の女をひどい目に合せて来る。嫐が出来た時に嫐を討ちに行くのでる。

その後に歌舞伎十八番にうはなりといふ狂言の名が伝はる。

その後、嫉妬といふ事になる。後に出来た妾（メカケ）といふ事。古くは後妻といふ事であるが、本当の後妻でなく、こなみに対してあるつまで同時にあるつま、妾である。うはなりに対して本妻が嫉妬する事から般若の面をうはなりといふ。妾の方を云はずに、嫉妬する奥方の方の面の事である。歌舞伎十八番は本当にあつたのでなく、後に忘れたのを新作したのである。十八番とも完全に残つたものはない。部分的に残つたものをかうもあらうかと作つた。

女敵討ち　うはなりうちに伴ふて室町より、女敵討（メカタキウ）ちが起つて来る。小説にうはなりうちは出て来ないが、女敵討ちは出て来る。江戸になると。女を寝取つた男

が女敵で、その男を辱をそゝぎに討ちに行く。世では馬鹿にしてゐながら出てゐる。西鶴等は、女敵討ちを馬鹿にして書いてゐる。狐を打つた話。武士の間でも女敵討ちを馬鹿にしてゐるが、士仲間では女敵討ちを考へたものである。武士道と士道と違ふもので武士道等いふものはつまらぬもの。儒教的に純化された士道の前の武士の感情道徳では女敵認められる。

室町の妬心物語は発心物語の前提　室町の妬心物語は発心物語の前提になつてゐる。苅萱の物語等を見ても、一番最初は奥方と妾の争ひを見て、発心する事になつてゐる。障子にうつゝた姿を見ると、女の髪の毛が蛇に見えたといふ。それを見て発心した。

これは女の方でも発心の最初は嫉妬から比丘尼になつたといふ。比丘尼の物語には妬心物語が大抵ついてゐる。室町では妬心物語は一つの添へものゝやうな形になつてゐるが、実は根強いものである。故に、お伽の小説「御伽草子」に継子継母（ままこままは）の物語の裏には妬心が働く。これを整理して、不自然な母と子の間に妬心が出てゐると見てゐるが、そのもとは母の間の妬心、室町では嫉妬を文学の題材としうる人はなかつた。江戸になつてすぐれた作家が出てはじめて文学の題材となる。

妬心物で、大切なのは男、女の嫉妬あり。男の嫉妬が江戸にまたがつていろんな物語になる。女のは断片的に出るだけ。妬心物語はいかにして行はれたかといふと、念仏比丘尼の手をくゞつたと見えて一種の教訓の物語になつてゐる。妬心を賛美せずに来世で苦しんでゐるといふ教訓になつてゐる。江戸に伝つて、因果物。江戸の御伽、怪談は陰惨になる。歌舞伎芝居では嫉妬は残忍、陰惨な形にぴつたりはまる。

嫦討ちと異類物　嫦討ちの期間は、鳥獣の物語、道具の戦争抔の非情のものが争ふたり恋愛する話と形が同じだと思ふ。猿、蟹、道具等の喧嘩、恋等の話が、嫦討ちに非常に影響してゐる。嫦討ちの絵を見ると皆台所道具を持ち出してゐる。

このもとは道具同士の喧嘩と同じ事。小説となると不思議だが、絵として見ると付喪神（ツクモガミ）の物語、鳥獣の物語と同じ。持つてゐる人は道具で、実は台所道具の争ひと同じ系統のものだと思ふ。前日の話とこゝで合流してゐる。それで私は嫦討ちの話といふものは、私は少

し信じない。妬心物語と鳥獣の物語と結んでゐる。

確執物語　（十一月二十九日）

御伽草子系統の確執物語、国、家同士争ふ物語。歴史的に争ふ原因あり。ずつと争ひつゞけてゐるものゝ話。確執（カクシツ）物の中で一番明らかに目について来るのは仇討ち。その一つ女仇討の話を妬心の話と結んでおいた。

仇討　仇討は、室町以後の文学を見る一の目のつけどころ。これは考へ方によると面白い卒論の材となる。平出鏗二郎氏が『敵討』といふ本を作つてゐる。結論や論理の立て方はわれ〳〵と一緒に歩けない。われ〳〵の歩き方は勝手なる故、これを一つ読んで見ることを勧める。

どうも論文の題を見て上手な人と下手の人とある。題を見てなさけないなといふものあり。卒論は学者として一歩踏み出すもの故に大きな題で進めらる題でないといけぬ。仇討をあつかつて見てもどうして仇討が出来て来たか。どう変化して来たかを考へねばならぬ。それについては、女仇討（メカタキウチ）等といふ不思議なものがある。

仇討といふものは日本の士道といふものゝ、その前の武士道と別で武士道以来のもの。士道で純化して合理的倫理的にした。だからもとの仇討では不純なものある。女仇討の如き変なものあり。

かたきうちは、自分のいゝ相手といふ事である。何も仇敵の意味でなく相手、手頃の相手といふ事。対等のものをうちあふ事が仇討といふ事らしい。仇の方が仇討より古い。仇討に似たものは沢山ある。親が殺されて国を取られたので国を回復した。安康天皇が眉輪王（マヨワノミコ）に殺された話。これは『秋道』の話と似てゐる。安康天皇は眉輪王の父の妻をとつて枕して寝てゐる。それを王が殺した。それから雄略天皇がすべてのものを征服する。雄略は市辺押歯王（イチノベオシハミコ）（いちのべにゐた大きい歯の王）の息が顕宗・仁賢帝。雄略に父が殺された。流浪中、播磨より見出されて清寧帝の時に迎へられ、天位に就く。即位後、父の墓を見つけると淡海置目といふ婆が墓を知つてゐた。（おきめは暗示を得る人といふ事）何か暗示でその人の骨があるといふたのであらう。普通は見ておいた事になつてゐる。歯を見つけたのであらう。後、雄略帝の墓を顕宗帝が掘らんとしたのを仁賢が止めた。古くから仇討風な考へはいくらで

もある。が、もつとさきは国が取られたから、又は宝物が取られたから、これを持つてゐるものを亡ぼしてとりかへす事になる。考へが変はると取られたものをとりかへすのは第二になつてまづあだを報いる事になる。だから昔のことばでは正式に仇討を表はすことばがない。

あだ・かたき　仇、あだはいゝ相手といふ事。君子の奴隷は仇と通じてゐる。配偶者の意味に用ゐてゐる。むこは仇といふ事に用ゐられてゐる。娘の配偶者を、手頃のあだ、かたきに用ゐてゐる。日本のみならず、あだ・かたきは相手といふ事にすぎない。古いところには後世の仇といふ事をあらはす語なし。それは第一に財産関係が大切。それをとる為に人を殺す。後に財産を離れてとにかくそれを殺さねばならなくなる。つまり社会的名誉を考へるやうになる。これは武家の発達して後のこと。武士道と士道とは違ふ。武士道で困るから士道といふ学問的に純化したものを作る。武士道と、その後もいふ士道と、ごろつき道徳と紙一枚の差もない。

支那の多少の影響があらう。支那の戦国時代の刺客伝等の影響を受けてゐるのであらう。そんな刺戟があるに違ひないが、粗野な田舎の武家の生活の家に、たゞ恨みをかへす事が一つの昔の仇討から遊離してまだ相手の生命を奪はねば気がすまぬ。傷はねば気がすまぬ名誉慾出づ。武士の間の習慣は平安朝まで冷淡で記録が残つてゐない。きつとあつたに違ひない。風土記には切腹が出てゐる。近江国の花浪（ハナナミ）の神は立腹して切腹してゐる。伊邪那美の神であらう。江戸時代に近松が『長町女腹切（ナガマチオンナハラキリ）』を書いてめづらしがつてゐる。

曽我物語の説　そんな気持、昔よりあつたのが記録がないのだ。文学に具体的に表はれたのが、『曽我物語』。関東の武家の生活が自然に『曽我物語』を生み出した。『曽我物語』は熊野の比丘尼、盲僧が宗教芸能を持つて廻つたのが、その一つの関東の分れの本山の箱根、熊野の宗教は物語の芸能あり。箱根もこれが出来る。『曽我物語』は、箱根を見ねば云へない。『曽我物語』はどこまで事実か。『東鑑』の曽我の記事は非常に怪しい。私はどうも『曽我物語』は事実あつたか、『曽我物語』にある程でも『東鑑』にまことしやかにあるほどでなく、宗教文学的の色彩が入つてゐる。

仇討の形が代はり、国家をとりかへす為の運動でも何でもない。何の為にやつてゐるのかわからん。結局北条におだてられてやつたのかと思はれる。歴史家風に見ると、工藤を滅ぼす為にそゝのかしたといふ。しかしこの説明はいけぬ。曽我は名誉回復の為、『曽我物語』を見るともつと純粋。子供の頃から残念でたまらぬ。母は京の遊女で、京で子を産み、河津の子を産み、後にまた善住坊を産む。近松その他は同情が深いので、京の小次郎善住坊等が曽我を助ける事にしてゐる。満江（マンカウ）を不愉快に見るのは後世風な見方。曽我のかゝりうどになつてゐる面ばれの為に仇討をするといふ風に解釈してゐる。割に純粋である。

さういふ仇討といふものは新しい仇討。この仇討が、『曽我物語』を通しての仇討が、仇討物のテキストになる。だから大抵曽我に似せてゐる。曽我に似せて来るが一方不純なものあり。後の女仇に残るが、女でなしに男同士の恋仇、まだ妻としてゐぬものをとられる話。恋仇は沢山ある。力が足らないと思ふて満足した。壬申の乱の起原たる額田王の話は嘘。そうして男は負けても、じつとしてゐた。それが名誉を考へるやうになると、恋仇討といふ気持ちが出て来る。

源氏の恋仇　恋仇は平安朝で淡白で、ねつく出てゐるのは『源氏物語』のみ。柏木の衛門督が死んだのは源氏が殺したのである。柏木が自分の一番後の若い北の方女三宮と密通したのに対して源氏が恨んでゐる。柏木は悪い事だと思ふてゐる。源氏は悟つてゐる。柏木にうんと酒を飲ませて後、病まして死ぬ。妻仇討は、源氏がはじめ。ひどい事を源氏は平穏に書いてゐる。女三宮の物語は室町より江戸へかけて影響あり。

恋仇討は、割合に淡い物。女のところへ競争して通つてゐる。女が固定すると手を引く。だから恋仇の感じが出ない。どうも財産問題から恋仇といふ意趣を構へる事があるのだと思ふ。これも武家の時代よりはつきりして来て、室町になつてはつきりして来る。

一方仇討の方は『曽我物語』は誰でも頭に浮かぶが、文学上の仇はこれを考へねばならぬ。皆似せてゐると共に、も少し複雑に不純になつてゐる。

これは恋仇を討つ話が中へ割り込んで来る為、鳥獣物語は大抵恋争ひを動機としてゐる事が多い。その中で有力なのは草木太平記等いふもの。一群薄（ヒトムラススキ）と梅とが桜

を争ふ話である。これは恋仇の物語である。かういふ系統がずつとある。これが江戸の黄表紙まで来てゐる。草双紙、黄表紙に何故仇討が多いか、問題にしてゐないが、事実仇討が多いのは草木太平記流の鳥獣物には仇討多し。純粋の仇討でなしに恋仇討が多い。それで文学の上の仇討が複雑不純になつて来る。室町時分の仇討は下手な趣向を立てる。それは本当に趣向を立てるといふより昔の話を正しく純粋に記憶出来ない為である。頭がふら〳〵すると似たものがよつて来て、書いてゐる。

室町の作者　室町の小説は昔物語の本案に過ぎない。それが進んで当代世に行はれてゐるものも入つて来る。脚色を立てゝ結ぶのでなく自然に結んで来る。本筋と脇筋の区別がたゝない。筆の作者しかり。口でいふ作者は更にひどい。違つてゐても、違つてゐないと思ふ。記憶の明らかな能力がない為に非常に複雑になる。脚色を複雑に立てたと思ふとあやまり。その中に自ら塩梅をうまくする人が出て来る。それからごく統一なしに話すものも出て、物語は発達す。ことに平安の物語と室町のお伽草子と違ふのは平安のは脇筋を加へて来るが、室町のは他のものが作者の頭に入つて元の筋だと思ふてゐる中に他のものが入る。故に複雑。単純な事は何も云へない。対の屋姫の物語は殆んど中将姫と同じ。作者の頭が悪くてああなつただけ。例へば室町の男色ものであるが、やはり中心がある。皆の好んでゐる中心へ作者が書かうとすると行つて了ふ。稚児物語、恋物語などへ行く。後になるとこしらへる事になる。十郎の虎に対して五郎に化粧坂の女性を考へるやうに。しかし室町ではそんなでなく考へ方に当時の考へ方の流行の型あり。純粋の型もあるが複雑なのは、性慾がついてくる。稚児物語、恋物語にくつついて来る。

仇討の複雑なものは男女の関係がついて来る。恋物語であつたり稚児物語する。稚児の話をせねば、この話は少し通りにくいか。

児物語　幻夢といふ法師が叡山へ行つた時に稚児に思ひついた。日光山の稚児である。これは宗教的な物語より出てゐるに違ひない。男色物語は室町で大じかけ、大事件を起こすものであるが、その元は『秋夜長物語』。秋の夜の長物語系統のもの、大抵道心をすゝ

めるもの。ことに幻夢物語は、私は何か寺へ説経としての発達の経路がうかがはれると思ふ。叡山に登り、稚児を見初め、そのあとを慕ひ、東国へ行き、日光で生きてゐる稚児にあつたが、怖ろしい形相して立つてゐた。打ち解けて寝ると位牌がある。これは江戸に続いてゐる妖怪物、一つの形、聞いて見ると実は、花松といふ稚児は武家の息子で仇に処領地をとられ、仇をとらうとするので僧としておいたが、仇を討つて了つた。その後、仇の息子が花松を殺した。それにあなたが来たので花松があふたのであらうといふ。後に一僧に会ふと、それが花松を殺した人。そこで道心を語りあふ。昔の人は、単純。世がすゝむと習慣的芸術的に悪どくなる。本然の要求でない。仇討の仇討をするのはもとあつた事でなく、社会生活より遊離してゐるものが作つて来た。仇討の物語も何か色気を持つて進んで来てゐる。丁度、幻夢の物語の少し前謡曲で有名な「富士太鼓」（「籠大鼓」、殆んど同事件）、住吉の伶人に富士あり。天王寺の伶人浅間と共に。楽の盛んな寺である。そして伶人同士の争ひがあつた。丁度その時に浅間が都へ伶人の試みに上ると富士が上る。すると浅間が富士を殺す。すぐ妻子が仇討に京へ上つて太鼓を破つて満足する話。こんなのはもつとさばさばしてゐる。仇討がもつとあつさりしてゐる。こんなのも発達する。血みどろのものをさけて気ばらし、名誉を回復の形式のみすればよい。□などは本当の仇討になつてゐる。

幸若の仇討　こんなのゝ出るのはお伽と一つ系統の幸若の影響。現在の武家の生活、好みを書いたもの故にどうしても仇討が問題になるが、幸若の材は古い絵物語、又は古い物語を翻訳して語つた故に割に仇討は少ないが、割合に仇討の確執（カクシツ）がよく出てゐる。幸若は殆んど修羅の妄執を燃やしてゐる執心物である。割合、幸若では平気である。曽我でも仇討をせず、他の方をやつてゐる。

仇討の物語には私は、御伽草子そのもの、発達の一方、お互いに同じ道を歩いて来た幸若の助勢あり。仇討（カタキウチ）をすると胸が開けて、出家遁世して了ひがちである。実際はさうでないのに。江戸になると仇を討つて本地を回復し、出世し、名誉も一藩にひゞく。為に出て行く。その中で身分の低い奴は一心にやつてゐる。万一やり

おほせれば出世する。どうも慾心が多いと思ふ。上の人はいやになつて了ふ。昔のはさば〳〵して仇をうつと僧になつてゐる。これは仏教式に行き、修羅の妄執をはらした後は罪亡ぼしをする事になる。

御伽草子の仇討　実際室町で大国を持つ人同志の間の仇討はあつたらうが、小さいもの丶間にあつたかどうか、疑ふ。御伽草子では、諸国を訪ねる事はない。仇が探してゐる。その仇を討たんとする。『秋道』でもさうである。親を殺した夜叉丸を殺す為に女房を手引に入れて仇を討つ。それを討つのだから難しいやうで楽。諸国をあてなしに訪ね廻る。富籤式の仇討ちは室町の文学では問題にしなかつた。次第に世の交通が開けると新主を求めてあちこち歩き、又身を隠すのに便利になつた時代だから、さういふ事が行はれると同時に仇の同志が低い身分になる。大名同志等はなくなる。

江戸の仇討とかぶきもの　江戸の仇討はかぶきものの道徳。それが武士を支配してゐる。武士が太平に慣れるのに対してどれだけ無頼漢の生活で維持せんとしたかしらん。各藩にかぶき衆が慶安の頃まであつた。正雪の乱で鎮まる。この一番古いものを残しておいて社会の刺戟にする。今の国粋会の如きもの。そして世がしつかりしてゐると思ふてゐた。

かういふもの丶道徳が小武家の頭に入る。これ等の道徳は宗教文学より分離出されたもの。かぶきものはもと宗教芸能を行つてゐたもの。幸若がかぶきものに入つてゐる。この芸能の倫理観が世の中の人の考へをかへて行つた。だから仇討の段階が次第に下つて来てゐる。

江戸のものを見て非人仇討が栄へる。これは江戸歌舞伎の中でははじめよりあり。いろんな形で発達す。幸若の後のかぶき衆の中に皆に仇討の栄へて来る経路もわかる。もつと一歩転じて考へると「富士太鼓」の話をしたが、これといくらか傾向の似た話。身代りと仇討と結びつけた名高い「てこくまの物語」あり。九州の二豪族が争つて一方が滅びた。一方の臣が娘のてこぐまを仇の家に住み込ませて相手を殺させやうとする。実は亡ぼされた豪族の女の名前で住み込ませる。見出されて殺され、その後改復して仇討をする。幼君を守つて、そこに身代りの話が入つてゐる。こんなの

になると仇討がはつきり出てゐる。御伽草子の信太には仇討がはつきり出ず、本領安堵をする事になつてゐる。時代が下ると本領安堵より仇討を主とする。芸術的になり一種の無頼漢の理想が生れる。我々の国に行はれてゐる事を呪ふのでない。祖先の生活は認める。道徳でなく芸術より出た幻想が純化したもの。仇討は御伽草子を境目にして近世風になる。仮名の草子になると仇討は栄へて来る。更に草双紙の世界に入ると仇討でないとだめ。黄表紙はどうしても仇討。通人に笑はれてふざけたものになる。しかし仇討にせんとしてゐる。草双紙の本筋は仇討。これがお家もの。家がついて来る。その前は仮名の草子。この前は御伽草子、次第に変つて来る。変はると共に武家の実際生活が取り入れられて来る。

御伽草子の本の形　御伽草子の話は本の形の上からも見ねばならぬ。

御伽草子は後世に影響ある点を求めると、その中の本地物、恋愛物、怪談物、この三つの影響がことにあるやうである。畢竟するに影響があるといふ事は、御伽草子にそれだけのものにおさまつて来る。御伽草子を要約するとこの三つになる。そのわけは前述。本地物は主として浄瑠璃へ行く。御伽草子は浄瑠璃と双紙の間に立つてゐる。故にすつかり浄瑠璃へ行く。又、芝居の脚本は浄瑠璃と別に御伽草子と影響あり。ことに江戸歌舞伎には本地系多し。これは幸若・お伽・歌舞伎芝居の三つの関係が、循環して多いので、歌舞伎芝居の中に御伽草子の影響らしいものがはつきり出てゐる。残るところは怪談と恋物語である。

怪談は江戸になると分裂していろんなものを生ずるが、一つは読本の根本の調子を作つて行く。読本ではまづ怪談から出してゐるといつてもいゝ位。仮名草子から読本へ行く。根本は怪談によつて。怪談の中に武勇物、あるいは有力物が御伽草子に入つてゐる。それが武道物、武辺者になつて行く。仇討物は江戸の仮名草子以来発達。その他に怪談の一部の鳥獣物、道具、動物を人間に仕立てたものが童の読み物、赤・黒本、黄表紙等になつて行く。われ等の時代は古いものはよみかへさない。漱石等でも努力がいり、紅葉、一葉などになると更に努力がいる。刻々に新読み物が出るから。昔の人は古いものしかないので見て楽しんでゐる。

故に江戸の中頃まで始終古いものを読み返してゐるので、古いものとあまり間隔のないものが多い。江戸中頃過ぎると本の洪水が起つて来るので古いものをかへりみる事が少なくなる。それを考へねば室町の小説の影響が江戸にそんなに残つた事がわからん。

恋物語は近世の小説の地ならしになつてゐるもの。おゞ草紙を卒業して恋愛物を作つて来る。元禄を境としてえらく前後に栄へた浮世草子、女の評判うがちを主とした一種の案内記のやうな文学の他に、も一歩古く叙情的な恋物語が伝つてゐる。江戸の小説に通じて見える江戸の恋愛物は浮世草子の亜流とのみ見てはいけない。これで御伽草子を読むもとだけ出来たと思ふ。御伽草子はおもしろくないが、これから出発してもらはねば江戸のものはわからぬ。

能狂言

普通、狂言といふ。狂言といふものは日本の演劇史で大切なものだが、割合ひに閑却されてゐる。読まれてはゐるが、本当な組織立つた研究はない。高野博士の論文がまづ筋の立つてゐるもの。狂言は御伽草紙と並んで室町以後、江戸に至る文学芸術の上に大きな力になつてゐ、芸術としての価値をもつてゐる。興味でなしに人間の生活に入つて来てゐる。

似たところを求めてもつまらんが、御伽と並べて話すのは、狂言も室町に作りはじめて室町で完成し、江戸になつても作られてゐた。江戸の初め百年頃は能狂言がまだ作られてゐた。御伽も室町に似せて、江戸で作つてゐる中に室町中心の擬古文、それと狂言も同じこと。

狂言は謡曲といふものよりは文学的にも意味のあるもの。日本の芸能の歴史より行くと能楽は世阿弥等が出てあれだけの仕事をし歴史として大切だが、渾然とした文学、まとまつた芸能としては狂言の方がすぐれてゐる。まづ狂言をいふ。

一体狂言とはどういふ事だ。語原をたどらんでもよいが、ある点まで遡らねば狂言の出来た最初も中途もわからず今のみわかる事になる。狂言はもとおどけたことばに過ぎない。平安では狂言利口と熟してゐる。興言といふのと結局同じ事。

同時に常に動作を伴つてゐる。日本の芸能はことばだ

けをはなしても、動作だけをはなしても考へられない。一方を主としてゐる事にはなつてゐるが、各々随伴してゐる。狂言とは結局、おどけた言ひ立て――長い連ねぜりふ――又つらねともいふ――細かく云へば言ひ立てとつらねは区別あれど、漠然といへば区別なし。つらねは、正式。言ひ立てはしやべる能力を示すので、原因や、故事来歴を述べる、強弁な人がする。狂言といふ事は、おどけた言ひ立て文句の意味を長く辿つてゐた。この言ひ立てには動作を伴つて来る。たとへて見れば、平安に盛んに行なはれた踏歌の節のことほぎといふものは詞でほく外に動作が沢山入つてゐ、滑稽な言ひ立てをして、それに伴つて動作をまじへる事。ことほぎは結局一つの狂言。この狂言がたまたま能楽に入つてゐるものだけが残つたやうに見える。かう考へるからして歌舞伎芝居のものまねに狂言尽くし等いひ、歌舞伎芝居すら能狂言の後だと考へるが、狂言はあらゆる芸能にくつついてゐるもの。たまたま能楽についてゐた狂言が有力に世間に働きかけて、長く残つたといふに過ぎない。歌舞伎芝居における狂言は別途のもの。相互作用はあるとしても、ともかく別に出たものと決めてかかる。

さて狂言はどういふ風にある芸能の本芸に結びついてゐるかといふ事から云はねばならぬ。本芸が行はれると、本芸のあとにあらはれて本芸の意味を説明し、翻訳し、平易に解説し、あるいは本芸の足らぬところを補ふ事になる。本芸はまじめ故にこちらはくだけた態度で出て行く□□□に滑稽となる言ひ立てを元として、それに伴ふ動作あり。狂言に限らず本芸に対立し、本芸を説明するものあれど、その中、狂言が一番有力となる。これをひきくるめていふともどき芸である。今一番便利故に能楽で云ふと、能楽といふものは、もと〳〵一種のもどき芸から発達して来た狂言だつた。それがいろんな民俗芸能の特長、演芸種目を合して来た為に形が変はつて来た。今の万才、安来節のごとし。さういふ風に猿楽もだん〳〵変化して来た。もとの猿楽はある芸に付属した付属芸。猿楽は何にでもつく事が出来たものに違ひない。時代により有力なものについたものが、はつきり後に残るだけ。猿楽は何にでもつくものであるが、たま〳〵室町に固定して来た。新猿楽は田楽のもどき芸であつた。猿楽はおどけ、滑稽、

言ひ立てを主とするもの。ところが猿楽が田楽より独立す。例へば、万才には才三が扮して才三座を作つたとすれば、万才と同じ事をしながら才三座といふに違ひない。しかし、おどけを主とはするであらうか。能楽は室町時分には一番栄えてゐた田楽出のものが勢力をもち、他の猿楽は勢力を失つてどこへか行く。もと〳〵さうした出発点ある故に猿楽自身本芸と考へてゐるものに対しても又更にそれを説明する芸能が出来てこねばならぬ。猿楽のくせで自分の本芸が固定すると、それに対して又滑稽なものが出る。猿楽がまじめになればなるほど固定し、それに対して又猿楽が出て来る事になる。（昨年云ふた）。

猿楽の一番本体となつてゐるものは猿楽の本芸、一口に猿楽といへば翁の事。平安の猿楽はも少し広いもの。だけども、やはり平安でも翁らしいものが中心となつてゐる。結局、ことほぎ芸で、それは年寄つた人の姿で人間ばなれをした怪物のやうなものがやる事は平安朝にも見られる。猿楽はそこにもなつてゐさう。近代の学問で見れば田楽は翁の芸。能楽では翁は厳重な芸となり、地方の翁の芸を能楽の翁で統一した。そこでほとんど違つた形のものがなく、能の翁のくづれと見られる。能の翁は、神聖と見られてゐるが、本当は滑稽なもの。翁の神歌はおどけた、性欲的なもの多く、畢竟、農村を祝福することばに過ぎない。翁の芸が能が三日五日続いても、後には名人は正月しかやらなくなる。毎日〳〵やつてゐたのを興行のはじめの日のみにし、明治は正月のみ。それは神聖な為でなく、猿楽の本芸だからやる。この翁にも複雑な仕組あり。この翁に対して翁をもどく芸あり。脇能といふ。

脇能は翁がすむとすぐにはじまる。中入りをせずにすぐはじめる。翁入り、三番叟、千歳、面箱持ち等が舞台から退くと、すぐに脇能ははじまる。二番目の芸である。俳諧の発句に対する脇句のごとく、第一と第二の関係はぴつたりついてゐる。翁に対して脇能はさうしたもの。脇能は性質からして神能といふ。みな神事。養老、嵐山、老松等。この脇能は能楽の歴史を見る上で、大切なもの。能にあれだけ沢山の番数が出て来るのは脇能といふ組織ありし為。翁の脇能たる神能は翁の意味の翻訳に過ぎぬ。言ひかへれば猿楽はもと賤しいものと世間から見られてゐた。わかりやすくすれば

賤しくなるのをもつと高尚にした。この中に翁は固定して伝説がつき、合理化せられてむつかしくなり、脇能と変な関係になつた。翁が今やつたのは別のやり方では、かういふ事ですといふて徹底させる。

能楽で大切なのは土地を踏む事。所繁盛の為に、□その所を踏み鎮める為。だから三番叟を踏むといふ。この踏む芸で、反閇といふ。力足を踏んで、土地の魂を従服せしめるものである。その翁が、翁自身の中に早くから脇能に属するものが出来てゐる。それは三番叟である。黒尉又は黒き尉といふもの。黒式面である。三番叟といふことばも本当は意味不明のもの。これが翁のやつた事がわからなくなるので、それを翻訳して、卑近になり、滑稽が混じりする故に三番叟のやり方は白尉のやるよりは品が下ると同時に活気がある。結局は同じ事で、われ〳〵のわかる限りでは農村の祝福といふ事がはつきりと出る。白尉では文句から見て行くとわかるけれども、動きからはわからぬ。三番叟はこれが農村の祝福だと明らかに見せてゐる。もとは農村の祝福のみでない。ほうえいの舞といふものは、錫杖の頭――鈴のやうなものを持つて舞ふ。法会の舞になると、これを持つて来る。これは寺の奴隷が寺の法会が行はれる前に寺の祝福に行く。目的はほぼ似てゐる。家と農村の祝福。そのいづれかに傾いて祝福するだけ。かうした三番叟が、黒きの三番。三番が発達すると翁はます〳〵わからなくなる。これが火の神と水の神との対照にして来てゐる。しかし、実は対立関係でなく従属関係。世阿弥の十六部集――沢山出てゐる。池内氏が口訳して出し、野々村戒三が注して出してゐる――等を見るといふと、翁を三つの対立と見てゐる。白尉、千歳、三番叟。千歳までも翁の一種と見てゐる。翁、千歳、三番叟の順で出る。千歳は翁の面箱を持つ。流によると、面箱持ちが出る。もとは、三の対立。世阿弥はこれを皆翁と見てゐる。この事は多少異論があるかもしれぬが、世阿弥がさうみるのは無理なし。千歳は日本の舞踊にほとんどはじめよりともなつてゐる若舞あり（雅楽より）。日本の古くから舞踊には年寄りが出る故に妖怪等が出る。そのお面を出し、この舞が出る。若い人が面を着ずにやる。年寄りのやる芸を若い者がやつて見る、といふ風にも見える。

蘭陵舞等には若舞が面（おもて）をはづして美少年が舞ふ。雅楽

では童舞といふ。外のものにもある事。さういふ式がある。為に猿楽の方でも、古く翁、千歳、三番叟の対立を皆、翁でやつたとも見られる。私は、疑問を持つ。千歳が翁である時の面は残つてゐて、冠者面――若者、やつと冠をかぶつた許りの若者――冠者面は翁の兒である。千歳が翁であつた事にならぬ。若舞であつたのに逆に翁面でやるものが出た。それで冠者で舞ふのが翁面でやつたので、冠者面といふのだ。私は千歳は翁で大したものでなく、翁三つにある時代にやつて見たか、冠者でやるのが本体故に冠者面といふたと思ふ。黒尉は、翁のもどきにすぎぬ。翁にすでにもどきあり。猿楽式の要素をいくらでも重ねて来る。さうした翁に脇能が出る。この脇能はまた上品なもどきなのである。上品な翻訳である。その時の目的にかなつたやうな芸を演ずるにちがひない。ところが、その脇能といふものは出来て来ると今度はまた拡張せられて、いろんなものが出る。能は五番仕立てであるが、番組は次第に前の芸をもどいて行くやうに見える。今からはさうはつきりはいへぬ。だけど脇能より又くだいて説明する。するといくらか世間風になる。神能ではわからんのでくだいてやる。世話的要素をもつてくる。あるいは、翁に対して一日の中の番組がすべてが翁そのものをいろんな方面より翻訳してゐると見る事も出来る。しかしそれに執着せずとよい。能の五番仕立ては必ずしも古い事でなく、もつと自由であつたにちがひないからも少しとらはれないで、考へて良いと思ふ。

脇能が能楽の種類をふやして行つたと考へてよいと思ふ。ところが、このわき能から後のものを見ると大抵芸には能を見てもわかるが、前じてと後（あと）じてとあり、前は人間に近いものであらはれ、後の場になると人間以外のものとしてあらはれる。前じてと後じてとすつかり別と考へられるものが出る。大抵、前は人間、後（あと）は妖怪になる。これが古いか新しいか問題。

前じてと後じてとの間に、中入がある。舞台空虚。前じてと後じてのある事はすでに前じての翻訳とする組織を、翻訳するのも有意的にしたのである。すると翁に対する脇能と同じで、どうしてもこの組織ははなれぬ。ところが前じてと後じてとの間をつなぐ間に狂言が出て来る。これが能の上の狂言で一番正式のもので、間（あひ）の狂言といふ。これは話しをする役である。この動

作をば間語（あひがた）りといふ。

つまり今やつたのは実はかういふ意味ですと説明する。それを長物語の調子で語る。次第にわき、つれ等が残つてゐるのが変なので、わき役者と狂言役者と話しをする。そして狂言が入ると後じてが出るやうにする。すると有機的に間語りが動いて来る事になる。これがあひ。間（あひ）の狂言。間語（あひかた）り。

さういふ事をするのが能楽の約束に入つてゐて、やはりもどきである。形のちがふ繰り返しである。あれほどじれつたいものはない。さうなつてゐるが、昔はわからなかつた故もあるが、一つはやらねばならぬのが猿楽の本質的の関係による。昔の人は面白がつてゐる。つまり今、能楽は値打ちがあるといふてゐるといふ。洋人がほめたからだといふ。浮世絵がよいと云はれたのと同じ。能等は西洋人の観察しやすい為であらう。西洋では黙劇、発達の歴史があるのでわかる。今人の能をありがたかるのは割引がいる。

この間（あひ）に出て来て、しやべるから、この言ひ立ての物語が狂言といふことばにぴつたりはまる。けれども日本の芸能の歴史を見ると、狂言といふ事はわき芸といふ意味をもつてゐる。故に意味は重なつてゐる。この言ひ立てをする狂言が、狂言方が定められて来ると、その狂言等が出て来て本芸の中へ入る。間語りに出るだけでなく、本芸の中へ入つて来る。するとこれををかし等といふ。をかしいから云ふのでなく、外にも少し意味があるのだ。つまり本芸の間にわき、してにあいづちをうちに来るやつ。をかしはもどくといふ事と同じ。おもしろい事をするといふ事でない。今より考へてをかしいと思ふてもよいやうになつてゐるが。狂言の仕事は次第に拡がつて来る。ところがもつと遡つて考へると猿楽の狂言方の仕事はもつと大切のもの。われ等の考へではわきのくだけたものが狂言。しては猿楽でやる時にやつたがもと。しては田楽役者がやり、猿楽役者はわきに立ち、わきのくだけたのが狂言。

翁を見ても三番叟は、狂言方の仕事になつてゐる。何故狂言方が黒尉をするかわからん。昔よりの仕来りといふのみ。もつと格式の正しい事を探つて見ると、舞台開き――年頭初めて能を舞ふ時、一番はじめに出て来るのは開口といふ必ずわき方の役者の仕事で、して方の仕事でない。われ等の考へでは、して方のやるべ

き事であるのに、わきがやる。わき開口にはじまる。だからよく考へて見ると翁もある時代までは、わき役者が務めたが、更に狂言等がやつたのではないか。古いほどくだけてゐたのが、次第に神秘に厳重になつて来たと考へるべきものではないか。だから、わきの開口と翁と同じ事。

これほど不思議な事は日本の芸能はへんてこなもの。歌舞伎等ことに然り。それにかゝはらず、かういふ組織がはつきりしてゐるのは能楽ほどひどいのはない。能楽はわき許り出てゐる。不思議なほど。

その他の出発はともかく間語りをまづ考へねばならぬ。その前に考へねばならぬは芸居のわき狂言である。

狂言と地狂言

本題に入る前に狂言と地狂言との関係についても一つ解決つけておかねばならぬ。

地狂言　地狂言は地芝居ともいふ。これは江戸になつて大きなしくみの芸能は二つに分れ、一つは歌舞伎芝居、一つは猿楽。高いものが猿楽で、低いものが歌舞伎。もとは幸若が上で、能は一段低かつた。幸若と能との対立が今度は逆に能と歌舞伎と対立す。能と常に対立して歌舞伎芝居を頭に入れておかねばならぬ。

地狂言の中で、格式を守つて古い形を残してゐるのは、三河の鳳来寺が関連して残つてゐるものが、最も古い。この寺はわれ〳〵の考へるところでは牛若と美しい物語ある浄瑠璃姫を、峰の薬師を祀つてある鳳来寺の薬師（以下一行空欄）

この寺にはかうした話、沢山あり。近世の芸能に対して、ぜひ調べねばならぬところ、高野氏は田楽、私は猿楽の方を調べた。この寺に地狂言あり。この事には早川孝太郎が『民俗芸術』に「地狂言雑記」を出してゐる。

奴隷村と座　地方〳〵の地狂言のうちでまづ古いもの、つまりお芝居の一つ。この村の芝居について考へねばならぬのは神社、寺に対して芸能の奴隷村があつて、その村が、お寺社の縁日、祭日に出て控へてゐる場所あり。後に経済上のことばとなり、座といふ。座は神事、仏事に関して行ふ時、村人の控へる場所。こゝに控へるのが累代の権利。控へる人がいつも家筋、村

によつて決まつてゐる。普通村を基準として、どの村へどこへ座ると定つてゐる。大字、小名の控へどころが定つてゐて神事の市のやうなもの。市の事にあづかつたもの、経済的な関係なもの、又市でなくても宮寺の供物の下り、又は特殊な宮寺に関係深い縁起もの、その外、そこへ行つて来たしるしを貰つて来る。つまり市と共に、宮寺の――今なら祭りの時に村人が出て手伝ふが、もと、この宮寺に直属の一種の売買行為をする。それの控へ場所が座。それが、後には宮寺の経済組織の解放後も、団体をもつてまとまつてゐるので、……の座といゝ、銀座、銅座……の町の感じの浮かんで来る、商売人の集まつてゐるところ。それが一方へ発達したのが、芸能の座で、座り場所、控へ場所が定つてゐる。それが座。その座のうちにわれ〳〵は空想的に考へるとまづ座があつて村を土台としてゐるとする一つの座にいろんな役をするものがごつたにゐると考へる。能のして、わき、狂言、皆一つの座にゐると考へやすい。一つの村の中にこめられて暮してゐるものといふ事になる。ところが本当のところはさうでないらしく、村々によつて、歴史によつて、ちがふが大体、ちがつてゐる。本芸とわき芸の村とは別である。

本座とわき座　同じ村でない故に神社等にても座に区別があつたらしい。本座に対してわきの座があつたらしい。田楽でも猿楽でも原則的に本座、新座等あり。後に地名を座の名前としてくる。かうなると歴史がわからなくなる。私は本座、新座等はもとは本座とわきの座（わきと狂言は私はしばらく一つとしておく）。わきの座が次第に発達して新座が発達して来たと思ふ。わき座は能楽ばかりにつくのでなく、どこへでもつく事が出来る。たとへば、田楽にも念仏にも出かけて行つて助ける風があつたと思はれる。その中に次第に本座との関係が緻密になり、本座と同じやうな芸を演ずる傾向になる。すると本座に対して新座と呼ばねばあはせなくなる。故にわき座の意味は広いものとなる。何かの後にくつついて、そこで固定して了ふ。丁度、ほやが岩等について変化して了ふのと同じ。だからわれ〳〵の国の芸能の上では、存外融通自在の芸人あり。するとそれに対して、わきの座の村が考へられる。このわきの座の村が何ぼでも意義を変化し姿をかへて行く事が出来るので、江戸になるとこれから歌

舞伎の中にものまね狂言尽くしの、狂言といふ歌舞伎のものはわきの座の芸が歌舞伎にまでついて行つたものだと思ふ。この話をすると大変長くなる。

まづ第一に文学史、芸能史をやる人で今のうちに調べるべきは芸人の村の分布と、そこでやつてゐる芸の細目を作る事。近代に出来たものも、古いものもある。空想してゐるより沢山ある。やつておもしろい事である。つまり日本の芸能を辿つて行くと、わきの座の村はなければならぬ事がわかる。万才でも普通の伝へは尾張、三河等より万才が出て来る。すると才三市が江戸市中に立つ。ここへ才三を買い出しに行く。才三は国が違ふ。上州である。それを買い出して万才と才三と一組になつて諸所をめぐる。これは極端だが、多くは才三と万才は便利故に一つの村になつてゐて、しかも才三筋と万才筋はわかれてゐる。もとは村が別であつたといふ認識が日本の芸能に行はれてゐた。

わき座の村はどの芸をも本芸にする事が出来たのだと申してよいと思ふ。それは、つまり、本座の芸といふものは、単純に考へると、神をあらはした形の芸である。万才でいへば、万才の太夫、神楽では人長といふ。それに対して精霊をあらはした芸をするのが、才の男。才男より才三が出た。

神楽で見ると人長と才男（万才の、才三と万才の対立）がはつきりわかる。別々のもので時間を異にして芸をやる中に人長と才男と絡みついてやる。そこにもわき芸と本芸とか各独立して行き、しかもある場合には絡みついて行はれる事がわかる。祭りの時に神が来て芸をしてゐる。そこへ来て、はやしたり、などする、もどき役連中がゐる。どこの祭りの時にでも芸能の行はれる時は招かれて行つて、もどき、ほめたりする。ところが本芸と関係が緻密になると、離れなくなり、どこへでもつくものは少くなり、わきの座の所属が決まる。まれにはもとの形で□□□□□ちやくとやつて、まだ自由な形を残してゐるものもあつたらう。

このわき芸の村の仕事は、何かと云ふと、地狂言、地芝居を調べると結局言ひ立てが主になる。それが正式に云ふて、格式のある言ひ方ではつらねといふ。言ひ立ては自由なもの。言ひ立ても古くよりあつて本格のことばであるが後、つらねより近く言ひ立てするのがわき芸をする人の一つの役。おどけた言ひ立てが沢山

ある。それが狂言。その狂言を主としてことほぎの事をやるのが第二義の狂言。たとへば、ほかひ、ことほぎが口でいふだけでなく同時に動作を含む事は前述した。

狂言といふ事はそれ。口で言ひ立てするばかりでなく同時に動作をする。神の行列に別に精霊の行列が練り込む。太秦（うづまき）のまだら神の祭りが（牛祭にまだら神といふものが出て来る。非常に卑猥な言ひ立てをする。名高い牛祭の才の男）こんなのある中で、わき座の村のやる仕事である。

鳳来寺の田楽と猿楽　鳳来寺は主として式楽は田楽らしい。これに対して猿楽の村がある。鳳来寺の下に門谷といふ部落あり。猿楽の村。ここの猿楽の意味が、ある時代の猿楽の意味がはつきりする。鳳来寺の猿楽の中心は猿の面である。これが一番大切のもの。翁は意味が変はつて了つて三番叟になつてゐる。能楽が勢力を得てより、在来の村々の猿楽の翁は皆次第に新猿楽にふくまる。どこのでも今の能楽以外に出ない□□□と能楽の勢力が強かつた。鳳来寺の地狂言では、猿が本体で、翁は三番叟となつた。これは略式になつて了つたのかもしれず、あるひは翁一人だけで演出を守つてゐるのか。これを古いとあまり考へると騙される。もと新猿楽の翁と同じく、翁、千歳、三番叟と三つになつてゐたものが、次第に略式になつたものと見るのが本当であらう。地狂言といふものは、一種のたままつり、たましひの出て来る時分にたままつりをする。門谷の西端の名高い墓場がある。その塚と鳳来寺の山への登り口との間をば往復する。塚からそこまで行つて戻る。その中間に十王堂がある。（関東東北に沢山あり）。十王堂が中心となつてゐる。地狂言は古塚の事と十王と、門谷の村を東へ出はずれた鳳来寺の地元と三つやる。墓より行列が出て山へ行く。□（空欄）十王堂のところでは一種の踊りをやる。そこまでしか登らぬ。故に田楽についてはいつ□（空欄）田楽と猿楽と別になつてゐる。恐らく門谷は後世に常に下つた村だと考へられた為に田楽を高く□（空欄）三河の鳳来寺は行きやすいところ。田楽と猿楽と残つてゐるところ故一度行つても良いと思ふ。

沖縄の狂言　ずつと飛び離れた、沖縄には日本の鎌倉、室町より交渉がはげしくなつた。政治上の勢力の

及ぶ強さ以外にある。沖縄の狂言を見ると、念仏についてゐた狂言が、沖縄で根をおろしたものと思はれる。本格の念仏宗は沖縄へ行かず、狂言が念仏宗として行つたのかもしれぬ。沖縄では芝居らしいものに組踊りあり。そのものは村々で行はれてゐる村踊りにある。主に盆に村芝居をやる。これより発達した、村踊りの中の狂言が影響してゐる。村踊りは村に行はれてゐる。すべての芸を総括した盆の時に、死んだ人の霊に扮装して出て来ていろんな芸をやる。村にあつたすべての芸を総括したもの。日本の隠し芸を宴会にやるのは宴会に招かれる人は芸能をせねば、やらねばならぬ約束がある。この法則を宴会に学んだもの。沖縄の村踊りにはそんな連中が扮装して出て来て芸をやる。その中第二にやる芸が村踊りより正式な組踊りに変化して行くもとのもの、これを朝元といふ。その朝元は村固有のもの。どこの村の狂言とて村によつて皆一□（空欄）外にどこの村は唐手が上手だ、棒か、どうしても村踊りでやらねばならぬのは狂言。第二のもの。

沖縄の村踊りは、歌舞伎芝居にも考ふべきもの。狂言を行ふ時に大抵やるのは、女子と百姓のおどけた葛藤を題材としてゐる。結局よくおさまつて了ふ。

日本のよくある、やるまいぞ〳〵の形か、平伏の形になつて了ふ。葛藤でくらいまつくすになり、解決はおさまりがついて了ふ。この狂言といふものは少くとも沖縄の村芝居の中では田舎のものでなしにさういふ間にさしはさんで来た大和の念仏芸人のもつて来た狂言をさしはさんで来たもの。その狂言と日本の狂言、それと古さを争はれて、京の壬生念仏の三つを対立させると狂言の系統がわかる。（沖縄の狂言も、内地の能狂言のもとの形か。結局狂言といふものは何にでもつく事が出来る。わきが次第に正式になると、次第にこれの一部分が狂言らしい内容をそなへて一旦栄へてくる。それが念仏にも取り入れられる。それが壬生念仏、（京で春の末に壬生その他二ヶ所行はれる）壬生狂言が固定する前に念仏聖の、□（空欄）念仏についたわき芸のものが持つて行つた。これ奴隷宗教化、聖の形のものが持つて日本を廻り、沖縄へも行き、村踊りの狂言と同時に種々の踊りを作つて来た。沖縄の踊りは万才の踊り。同時にこの万才は念仏聖、それは更に一種の自由な、融通無碍な狂言の伝へた芸にすぎない。

問題　狂言
本地物の研究
文学にあらはれた童話の研究
近代文学の特殊相（室町より江戸へかけての文学の）

狂言

昨年末は狂言の形の農村にうぶな形が残つてゐる例として、沖縄の話と三河の鳳来寺の地狂言の話をした。地狂言といふことば、地芝居といふことばは歌舞伎狂言発達に対して云ひ出した、その土地根生いのもの。中央の標準的もの以外に一つの領土を持つてゐるものといふ自信をもつてゐる。中央に対抗するだけの自信を常に「地」にもつ。江戸唄に対して、地唄といふが如く。地芝居、地狂言はいたるところにある。かく地芝居、地狂言の名は併行してゐる。今でも。

さまざまな狂言　狂言には、二つの重なつた矛盾した投影を持つてゐる。学者でも、歌舞伎狂言は能狂言を通して発達したと考へてゐる。まして普通人の智識では、自分等のやつてゐる事は、由緒があると考へたがる。その事を見ても、『狂言記』を見て系図争ひをするものが多い。これは狂言だけの事で、今の話と別であるが、由緒を誇りたがる。地狂言は面白いにかゝはらず、平凡な昔のもの、又は現在行はれてゐるものより出来たのだと言ひたがる。地狂言は能狂言と同じ事だと云ひ、能狂言の地方的に発達したものと考へ、やつてゐる事は歌舞伎狂言そのまゝをやつてゐて、本当に昔のものをやつてゐない。来歴は能をとき、現実は歌舞伎狂言をしてゐる。地狂言には近い狂言、古い狂言の二投影あり。

さういふならば京の壬生の念仏の狂言、踊り念仏等いふものが別にあり、この系統の地狂言もある。そんなものと中へ入れて考へねばならなかつた。それをいはぬのは、本当の歴史を忘れて今世でやつてゐる、又は過去の有名なものを、自分のところに取り込む。その著しいのは鳳来寺狂言。江戸幕府の狂言役者が盗みに来たといふてゐる。しかも、百年位は歌舞伎芝居をやつてゐた。どうして江戸の狂言方が盗みに来るものか。空想である。こんな空想はどこの芸人ももつてゐる。相模の大山の能は有名だが少しも変はつてゐない。昔は特殊であつたのがだん〳〵能を取り入れたのである。しかもこゝでも遠くない以前に江戸の能役者が盗

みに来たといふ。

狂言はかく幾通りもある事を考へてもらはねばならぬ。今考へてゐる能狂言以外のもの沢山あり。別途に発生したもの多し。能狂言の系統より出たといへぬのに後には、能狂言と提携し、模倣するに至つた。故に演劇史研究は歌舞伎、又は能楽よりはじめ、歌舞伎は能の模倣、又は能狂言の模倣だといふてゐる。それも筋立つて云ふた人は少ない。云つて望少なし。

さういふ地狂言発達の道を考へると能狂言のそれもわかる。

狂言は村々にみな特殊なものを必ず一幕だけ持ち、それを挿んで前後に演芸が沢山あつた。だからある神事、仏事に行ふものは名前が狂言でも芝居であつても、その中に本当に狂言と見るべき部分は一つ。次第に狂言の部分がおもしろがられて来ると、狂言の部分が増える。

村々の狂言といふものは、越後風俗問状答（北越月令）屋代弘賢が役柄を利用して好古癖を満足させる為に諸大名、代官所に問状を廻した。そして年中行事を問ひ合せた。その問状に答への来ないところもあつた。それに風俗問状答といひ断片的にある。出羽？より越後へかけてぼさまとて琵琶弾き、盲僧が歩く。その琵琶の文句をば答へてある。ぼさまの早物語と云ふものを書いてゐる。歌の方では早歌といふもの、形を琵琶でやる。早歌は言ひ立て文句で、つらねぜりふといふものである。外郎売等するつらねぜりふにすぎない故に自然口早になる。それが早歌、はやうたである。それを早物語といふ。琵琶盲僧が経を唱へながら琵琶で弾く。地神経等の済んだ後に早物語を語る。滑稽のもの。この月令にたつた一つ歌舞伎に大切な口早文句あり。武蔵の国の足立郡に中村屋勘三郎あり。芸能に達して動いてゐた。神も感応して、助けられた。或時、木に成り物が沢山出来た。その成り具合を早口に云ふた。これはつまらん話だが、江戸の猿若座の歴史の第一に出てくべき大切な材料。中村勘三郎は出処不明。知つてゐても隠し、忘れもする。どの道芸人は特殊部落である。中村勘三郎を中村屋といふ。これが歌舞伎芝居の縁起を説いたものである。根も葉もないやうな事であるが、却つて信ぜられる。まづ武蔵の北足立郡あたりに居つた事は考へられる。どうして村に住み着くか。

先の時間にさういふ連中が、祭りがあると、寺社へ来て、控へてゐる処が座である。仮に中村といふ村があつてそこの芸人どもが神事、仏事の関係より中村座が出来たとすると、村が座を作る。村と座とが同じものになつて来る。芸人の団体の生活にも一つちがつたものあり。古くは一つにかたまつて特殊部落を作つてゐる。それがかたまつてくると村の中に一種のそぶりした特殊民が出て来る。つまり村はづれに箕や竹の籠を作つてゐる家があり、町の中に床屋があり、肉屋や靴屋がある。――東京では良民がやつてゐる――そんなもの、外、番太等みな特殊分裂したもので、もとは特殊団体の村より集つて来て、村に附属さしておく。山番、隠亡等いふものがその適切な例。

山かげや身を養はん瓜畠　　芭蕉

近年まで山番の村より、山番を雇つて来て村に置いた。隠亡も隠亡の村がある。昔はこゝまで身をおとしたら身が上らなかつた故である。今では職業と身の素性をちがつてゐる事を知つてゐる。明治維新四民平等としたら新平民といひ、水平民といひ、特殊部落等といつても皆、軽蔑語。

隠亡や山番は特殊な村より雇つて来るのである。隠亡は下級の念仏聖の団体である。かういふ風で狂言の役者といふものが村々に出来て来る。村々の祝福の芸能――村々の農作を――のうち一番喜ばれ、親しみの強い部分は狂言の役者で、それが隠亡の如く山番の如く、紺屋の如く、村々に附属してゐた。団体的に歩いて来る祝言職人の一部分が根を下して行く。村では大仕掛けな芸能の興行が出来ぬ為に、その中の大切な部分だけ取り残しておく。だから、田舎へ行くと芸能団体が少しづゝついてゐ、しかも大きなものもある。近松の雪女（編者注、雪女五枚羽子板）を見ると、もとよりだんじり囃子に文句があつた藤内太郎次郎等いふものをとつたのである。藤内といふのは特殊である。芸能をやる非人である。特殊である。浄瑠璃の上ではきれいになつてゐる。事実、藤内といふのは特殊で藤内の村あり。又、村を離れて大きな家に附属してゐる藤内といふものがある。肋骨が一本足りないと言ふてゐる。十本の内一本足りぬ故。

藤内は処々にある。神楽の芸人――民間でいふのは御師――神楽師を中心として用ふ芸が神楽。普通、社以

外で舞ふてゐる神楽は獅子舞を中心にしたものである。神楽にも神楽の村が沢山あり。村と村に一、二軒ついてゐる事がある。神楽村がある傍ら村に神楽をするものあり。村の中に附属して村より下めに見られてゐる。特殊な芸能人あり。もと村中の一番大家についてゐたものにちがひない。その外のものは、家が増え、家もよつたか芸能のもの、下り職のものはいつまでも村に付属してゐる。

穢多は、牛馬の死骸に触れたのできらはれたが職としたら、芸人より上かも知れぬ。芸能人はいやしいものと思はれてゐた。ところが芸能だけは特殊を師道にして叱りとばしながら教はつてゐる。

で、村で村の中に特殊な人がやつて居りながら、その芸は良民のやるやうになる。歴史的に見て低いところよりおこつた芸を武家がやるごとき。宴曲、以前の白拍子、下つて田楽、猿楽など特殊であるのに芸だけやる人には貴族や皇族が交じる。だから村方の狂言は必ずしも、特殊がやるとは云へぬ。村々の事情が異なる故にかはつた伝説風習が起つてゐる故に、一概には云へぬ。特殊が村にゐて、しかも他村へ狂言をかせぎに行く事もある。村々附属してゐる芸能の賤民といふものは、まづ豪族のゐる村には豪族の所属としてあつたにちがひない。これはおそらく時代はそんなに古くないと思ふ。さういふ事が起つて来る事情は外にある。社寺の精霊は神事、仏事に出る。村々の子孫だとか山人だととかいふもの、形が後になると村々に狂言の家がついてゐる形になつて来る。

大体、普通の能狂言と歌舞伎狂言と通じて狂言をする賤民が村に断片的に附属して住んだといふ暗示だけを云ふたと思ふ。

猿楽の中から何故田楽の中で……狂言が離れたか。その事実で見ねばならぬ。この能楽についてゐる狂言も次第に新作が加はつてゐると考へねばならぬ。事実、新作能が江戸になつても沢山あるやうに狂言も作られてゐる。それを知つてゐながら能は室町、狂言も室町と考へてゐる。区別がつかぬ故、能には書物あれど、末日番などになると、新作だといふ事がはつきりする。狂言では新しいものがあるにちがひないが、区別が立たぬ。部分的に新古あればしかたなし。狂言の方はも一つそのある曲の新古を分つ事がむつかしい。けれど

もこれは頭へ入れておかねばならぬ。時代〳〵によつて能も新作がぼつ〳〵時代の好みにあふやうに、謡が新作されて来た。昔はさう高尚でない故にかなり当時の気持にあつたのが入つてゐる。近代的なものに古風な着物を着せたもの多し。われ〳〵が万葉ぶりの歌を作るのと同じ。さうしなければ歌でなくなる故に形式と内容妥協あり。目の光らぬ人が見ると特別に新しい一団をなしてゐ、なければわからんが目を光らせて見ると近代的な事と擬古的な表現体を用ゐてゐる事がわかる。狂言になると最もさうである。

狂言には台本といふものが定まらない。謡だつて、定まらぬといへばいへるけれども、狂言は定まらぬ。幸田氏のも国民文庫のを見ても大蔵、和泉、鷺三流の狂言は趣味は似てゐるがことば、対話が自由である。今ちがつてゐるのは統一がついて来てのちのしかもちがつてゐる点である。各流で勝手に狂言を新作し――必ず類型によつて、新しい題材を少し入れて来てゐるだけ――□か新狂言は流々により、又一つの流でもふえて来たもの。それが室町、織田、豊臣時代の詞で云ふてゐた古い狂言を書き留めたことばによつて時代のことばをいひなほしてゐるので古めかしく見える。

故に私は狂言によつて室町の文法を出すのはことに危険だと思ふ。大体室町のものでさうかはりはないと見られてゐるが、危ない。狂言はやる人が字のない人である。故に古いことばのあらはし方でいふて来る。昔に翻訳しやすいことばばかりである。例へば狂言のうちには、奴狂言とも云ふべき能狂言あり。その狂言は、後まで分化して残つてゐるのは、のろま人形の台本に残つてゐる。奴狂言と見なしてよいのは沢山『狂言記』に見えてゐる。これはほゞ江戸になつて出来たものにちがひない。大体擬古文である。この中に奴ことばが出て来る。ことばは古めかしいが、緻密になつてゐる。そして新味も。

さういふ風に新しいものあり。これは固つて新作せられたのでなく、ぼち〳〵時勢に応じておもしろく芸能人の間に□ませられて来る。

今云つたやうな奴狂言ともいふべきものは、すべての芸能は、おとなしやかな芸能で荒事趣味をかけた奴芸あり。狂言にもそなはるその系統をのちまで残したの

が、のろま人形である。今佐渡には今も残つてゐる。文弥節と共に。――未刊随筆中にあり。

して、あと等が狂言では決まつてゐるが、のろまでは皃色で定つてゐる、役割も。

のろまの研究

未刊随筆百種（巻三）「迂鈍」といふ名前の本あり。これが室町の人形の脚本である。此処に残つてゐるのはたらふく大尽、水鏡、うかれ夷、大法印、くらま詣、五番載つてゐる。大体の気持がお目出度いものである。のろま人形は今のふくさ人形の類に属する。

指で使ふ人形の式のものである、根本の形は。ところがのろま人形の起つたについては、本当の定説はない。昔からの説は伝説である。野呂松勘兵衛のやつた人形故、のろまといふといふ事になつてゐる。のろま人形は起原を新しく見る人と古く見る人とあり。私は名前は新しかつたにしろ、事実は割に古いものだと思ふ。これは狂言と通ずるところがあつて、非常に新しくなつてゐる。仕立ては古いが。これは鬼七福神を扱ふもので前日読んだのと似てゐる。私の云ひたい事は、のろま人形はどうして出来たかといふ事である。まづのろま人形だけについて私だけの成立を論じてみたい。まだよくまとまつてゐないで何れかへねばなるまいと思ふ。

これを見て、どんなものでも同じものは出て来ぬが、日本の芸能の上ではいつも同じ時代又はちがつた時代に同じ文学の上、ちがつた文学の上に同じ形が出て来る。

その点は室町、江戸の通史の上でやるか、室町と江戸とは時代はちがふがその間の芸能文学が皆一つの進み方をしてゐる姿が見える故に、常に室町、江戸を振り返つて話していかねばならぬので、これまで一年間皆をあくびさせた。

これを見て思ひ出してもらひたいのは、黄表紙。これは赤本、黒本に比するとその成立はよくわかつてゐる。それは、赤黒本は子供に読ませるもので、室町の御伽草紙のごく低いもので、御伽草紙を読み切る事の出来ぬものに読ませるもので、御伽をもつとつまらなくわかりやすくした。その中に青表紙を出し、黄表紙を生んで来た。青表紙より黄表紙にかはつて来る経路に、だん〳〵かはつて来た事は内容が大人の弄物とな

つた。大人が、江戸の通人ぶつた人、粋人、粋士が何故子供の読み物を喜んで読んだ。之、疑ひもなく世間を馬鹿にした気がある為である。世人より馬鹿な奴が世人を馬鹿にしてゐるので、今の学者と同じ事である。江戸では作家の階級と読者の階級が近寄りやすい。自分が作つて読ませる。仲間にも。読者の階級を広げないのが江戸の特質。？

一方に商売人があり、作者に商売気があるので、この反対の風もあるが、自分の仲間にのみ読ませる風あり。何ときついものかといふ類で作者が常に皃を出してゐる。

さういふ風に人を馬鹿にして同輩の者が同じく楽しむものが多い。これは、日本文章の御伽、赤本、黒本、青本をこえて、黄表紙に来て定つた一種の皮肉――私は皮肉とは許さないが――その他にもやはりかういふ種類のもの多し。洒落本と人情本と比すると彼はこれである。

人情本は大衆的に挑発的になる。洒落本には書き方は小さく固定してゐるが小さく見識をもつ。

洒落本の出来て来るところからそれがある。つまらぬ評判記より発達して漢学書生のかうを経た儒者の片手間の遊びものから転じて洒落本が出た。

漢学者、ごく幼稚な形を学びながら、女人を馬鹿にしてゐる。そして自分が馬鹿になつてゐる事を気がつかぬ。三馬がその手本。賢い人であるが、われ〳〵より見れば底抜けの大馬鹿であるが、書いてゐる事はかくこれこれが大衆的になると一九のやうになる人はよいけれども、通（？）の文が多くなり、滑稽が誤解せられて来る。

かく世間に行はれてゐる一番低い読み物、芸能の形を使つてしかも自分は世間で一番高い位置に居ると思ふ人等がその形式の中でいろんな皮肉や当て込みや、うがちを云ふたりする。

それが非常におもしろい。何もかも飽いて了ふと、そこへ行つて了ふ。世間を小馬鹿にした。そうなつて了ふ。のろま人形の台本を見るとその気分が多い。

のろま人形はどんなものか。私は普通の指人形、いはゆる手すりにかかつた――操座の舞台のかまへから、操人形の事をてすりといふ――ものである。どうしても人形はある箱の中でつかはれた事がわかる。ところ

がこの操り座の舞台の形は疑ひもなく首に掛けて歩く人形芝居の形である。われ〳〵は人形遣ひは箱から手を出して使つてゐると思ふのは

が廃れて後である。かういふものが諸国を歩く一種の下級の宗教と芸能とをもつて歩き、神仏の縁起を語り、人形をまはして行つたといふ事はいへる。それが次第に発達してかういふ舞台まで来た。のろまはこれの発達したもので、てすりの人形の退化して小さくなつたものでない。首へ掛けて歩く箱である。かういふ箱を使つた人形遣ひの人形より発達。この連中がふくさ人形の形をとつて来た。のろま人形は首が役の名前である。淡路でも文楽でも首に名がついてゐる。

首に名前がある。のろまで一番よく目につくのは青赤といふ人形である。青は一番人形芝居の中で古さを残してゐる。文楽の人形の中一人遣ひのものがある。黒子をぬげない連中が一人で遣ふものである。でこ人形と今いふてゐる。——もとでことは、広い名前であつた。皆青い兒をしてゐる。ごく単純に兒で役が決まる。芝居の立役女形、□□形等と決まつてゐるのと同じ事である。それでこののろま人形の発達はこゝにある。通人等がかういふ人形を座敷芸にした。てすり人形を座敷芸にしたのではなくして、世の中でいふ傀儡師といふ人形（文学だけのことばでほとんど使はぬ）をもつて町で子供を集めて見せた芸である。宗教的な辻芸がそこまで落ちて来て、宗教色彩を失つて、子供だけが楽しむ芸となつた

これを乙だとして取り込んだのである。これに使ふ台本が次第〳〵に出来て来た。その台本がどんなものであつたか。はじめののろまになる前から、なつて後、今、読んだ様な後ののろま人形の台本になるまでにどう変化したか考へて行かねばならぬ。今の台本を見ると著しく狂言の中の歌舞伎風な表現と似てゐる。一体のろま人形といふものは、いはゞ江戸趣味の生粋ともいふべき、混じりけのない江戸ことばの入つてゐるもの。狂言の中へ時々江戸の洗練せられたことばで悪態を云ひ、皮肉を云ふやうになつてゐる。芝居の狂言が普通、能狂言より出たと考へてゐるが、私は能狂言との関係は比較的はじめ浅くて、後ほど濃厚になつて来た。しかしこれはかういふ事である。——ある狂言はある村

で発達してゐ、あるものはある村で発達――古いまゝのものは能狂言のまゝで発達し、発達したものは歌舞伎の形のもとゝなつた。その間に歴史が見られる。といふのは根本がちがふ。村の狂言のみは特殊でなければいけぬ。狂言としての意味は同じいが出発点がちがふ故に歌舞伎狂言と能狂言はちがふ。普通の能狂言と地狂言とはじめから同じであるとは決していへない。皆変つたところをもつてゐた。ところがその間に互に芸能の交換が行はれた。歌舞伎狂言と浄瑠璃物――竹本ものが芝居に入り、芝居のものが少数乍ら浄瑠璃に入つた。さういふ風な事は狂言だけの上にはなかつた。それは能狂言は能に伴つた為に格式が高いものと自負せられ、その為に普通の狂言以外に立つて来た。だけどこの間いふやうに能そのものゝ中にも歌舞伎芝居と通ずるものと狂言には荒事風な狂言がある。だから、判然と区別が立つて来るにしても古いところではどうしてもお互に影響がないとは言へない。丁度、こののろま人形といふものは、芝居の荒事と同じもの。歌舞伎の歌舞伎たるものと同じ素質を持つてゐる。その歌舞伎は又能と通ずる部分がある程度ある。之を普通に考へるとのろま人形が荒事趣味を持つてゐるとすれば義太夫浄瑠璃以前にあつた、操り人形の影響だらう。桜井但馬の掾等といふ人一類の人形師の人形は荒事の人形浄瑠璃でいへば金平浄瑠璃。さういふものゝ直系だと考へられる。さう考へて安心する事も出来る。けれども私はも少し考へて見なければいけないと思ふ。単にそんな事ならば浄瑠璃以外のものが入り過ぎてゐる。歌舞伎でない荒事風が入り、あるひは能狂言の中の歌舞伎風のものが入つてゐる。かういふ風にいふ事が出来る。